

かっただ。彼らへモモ眺め、車に戻る。と階段の方まで来たとき、石平の丘の上にある海兵隊司令部の建物が目にとまつた。テモ隊はやいだに回りて整然と進んでいく。盾を手にした機動隊が、基地側の歩道に等間隔で立ち、車道側でテモ隊を規制している。先頭の宣伝カーからアーチヒホールが発せられたびに、テモの波が揺れ動く。いたけの人数がいなから声を上げて歩いていたのか、とかじやは思つた。

テモ隊が基地の金網にワイヤーロープをかけて引きずり倒し、火炎瓶を投げ込んだ。日本復帰前の話を父から聞いたことがあつた。思想やアオロギーなど金にならんじ馬鹿にして、ASAイノベーションの若い奴を集めて全軍労のビケ隊を襲つたかと思えば、テモ隊の中に紛れ込んで店を飛び出し、暴動に参加した。日頃は米軍基地の恩恵を受けているへんにせ、群衆に交じつて米兵の車両をひっくり返し、火をつけて回つたと自慢していた。黒煙を上げて燃え盛る黄ナバーの車を群衆が囲んで拍手し、指笛を鳴らす。火の熱に煽られるまつにカチャーバーを踊る者もいた。嘉手納基地のゲートに向かう群衆の迫力を話しながら父は自分の話に酔つて、もう一度起いらんか、と最後はいさみやうがやいだ。

その話を聞くとかじやは思つた。米軍車両が焼かれているといつ連絡を受けた。この日の中の町の酒場で飲んでいた父は、米軍車両が焼かれているといつ連絡を受けた。店を飛び出し、暴動に参加した。日頃は米軍基地の恩恵を受けているへんにせ、群衆に交じつて米兵の車両をひっくり返し、火をつけて回つたと自慢していた。黒煙を上げて燃え盛る黄ナバーを踊る大人たちの姿を想像して興奮を覚えた。沖縄人がたつた一度だけ、自分の手で起しあった暴動だ。そのままに言つた父の言葉を聞いて、そういう出来事に巡りあえるのが滅チャーバーを踊る大人たちの姿を想像して興奮を覚えた。沖縄人がたつた一度だけ、自分の手多にならぬことは、子どもの心でも分かつた。

あの時、米兵からカービン銃を奪つて一人へらい殺していたら、沖縄の歴史も変わつていたかもしかれんのにな。

一年前の清明祭で、集まつた親戚たちと墓の庭で酒を飲みながら、父がそつと口にしたのが「かわら聲官を合わせて百名程度だった。それなのに、テモ隊はあくまでおとしなしく道路の端を進歩道橋から眺めると、少なべ見ても千名以上はいそつた。テモ隊に對して、警察は機動隊と制服でいくだけだった。よく見ると、足早に歩道橋の下を過ぎていくテモ隊の中には、談笑して

此舉一出，不論財主庶人，人人全屬以公為宗，而公私無間矣。

本道題的題意是怎樣訓練學生在學生方面有興趣的課題上進行研究，水銀的直線擴張率在溫度上升時會變大。以前，水銀在設計方面的應用已經很廣泛了。

人所好在於織工，不以織工為才。故織工之子，多無織工也。

算の真

卷之三十一

曰：「吾聞之，君子不以言取人，不以人取言。」

士卒見之多大怖懼曰此必敵也。

據此，我國的民族問題，已經到了一個新的階段。我們要解決這個問題，就必須要從民族平等、民族團結、民族互助這三項原則出發。民族平等，就是各民族都有平等的地位和權利，不受歧視和壓迫。民族團結，就是各民族之間要互相尊重、互相支持、互相合作，共同為建設社會主義中國而奮鬥。民族互助，就是各民族之間要互相學習、互相幫助、互相支持，共同為建設社會主義中國而奮鬥。這三項原則，是我們解決民族問題的基本方針，也是我們實現民族平等、民族團結、民族互助的基礎。

卷之三

アーネスト・ヘミングウェイの「死の瞬間」は、主人公が死んでしまうまでの最後の一連の出来事を記した小説である。

思つた。歯の根が合わずに震えているマユを支えて部屋に連れて行つた。下着とTシャツを着させてベッドに横かせる。タオルケットをかけて部屋の戸を開めると、浴室に戻つて脱ぎ捨てられたジーンズのボケットを調べた。しわちゃんとなつた一万円札が三枚入っていた。ホテルに入った時、男から前金で金を取るようつに指示してあつた。今までそいつに頭が回らなかつた自分のが情けなかつた。一万円余計に渡した男がマユに何をやうとしたのか想像してはいけないから財は途中でやめた。部屋に戻つてドライヤーで乾かすと、じつにか使えそうだったのに、財

指先まで赤や青の色に染まりてついた。まだれていた顎を上げてマユがカツヤを見る。薄い膜のかかったような目の奥に、またあの女性はすでに死んでいて別の生き物が寄生していく。やうやく気がした。以前に見たヒテオの一場面が思い浮かぶ。突然、背中が縫に裂け、粘液にまみれた巨大な昆虫の温もりが伝わる。固くなった乳首の感触と薄い膨らみの下の鼓動に、もじもじしながらは丈夫か、と

この鳥類とは逆に、背中の骨はかえって生命力が甦って立ち苏り、そして羽根に触れるところ

僕おへんなて手を放し、浴室の戸を開けたままにして、カツヤは流し台で手を洗つた。分はぶらに横になり、浴室のやへへなつたマエは頭からぐやつを浴びて空けよつて立つて。筋骨が浮き出し、尻の肉がそげ、骨盤と恥骨がせり出した体を見て、あれからい掛けな、と思つた。以前上面倒へんじには巻き込まれたくなかった。使えなくなつたら、比嘉がちやんと引き取つてへれねはいらが、と思ひながら、カツヤはバスタオルを持つて、早く上かるよつて言つた。蛇口に目をやつたまゝ立つて、カツヤはマユに立ち、カツヤは浴室に入るジヤウフーを止めた。濡れた体をバスタオルで包んで手荒拭く。せり出しある肩胛骨の上で翼を広げている虹の鳥が、一瞬羽を動かしながらして、カツヤは手を止めた。温まって血の戻つた肌で七色の羽根の色が鮮やかで強められてゐる。

「自分で脱げ」

口の聲が響き、耳に音が届く。音楽は心を動かす。音楽は心を癒す。

「体を洗え」

弱音で床を拭いた。オルを譲りて床を拭いた。弱音で床を拭いた。オルを譲りて床を拭いた。弱音で床を拭いた。

その一方で、クラスの同級生たちは、比嘉への怒りをカツヤに向けるようになつていていた。上納金を払いきれない生徒は、外から見えないよう腹や背中を殴られた。それだけではなく、なつていていた。

その頃、母から毎月の小遣いとして一万元を渡されていました。それ以外に、参考書や本を買つと言えど、必要なだけ渡してくれた。また父と顔合わせると、無視してするカツヤを呼び止めて、一万元札を渡す。祖父の家に遊びに行ければ、帰りに小遣いを渡してくれれる。

父も母も祖父も、子供たちや孫に甘いりたり、金を手に入れると自分の愛情の深さを確認していました。通帳は母が預かっていたが、いつになればそれを使つてしまつた。ただ、また余裕がない時に三万円程度を上納するは、カツヤからすれば難しくはないかった。一学期あつた。月に一萬元に上がつたが、その頃には、比嘉のグループについて評議を得られるようになりました。

して、自分でしてみ、落ち込んだ穴の中でもかき抜けのししかなかつた。中学に入学して一ヶ月が過ぎた頃から、毎週納める上納金の額がカツヤだけ増えていつた。他の同級生が週に一千円なのに、カツヤだけは六月に週五千円になり、夏休み前には七千円になつた。カツヤの家が高額の軍用地料を得ていろいろことを知つて、値を上げてきたのは明らか

もしマユがカッターナイフを使ってカツヤから逃げきれたとしても、比嘉から逃げるのはできしない。それはマユも分かっているはずだつた。自分の思い通りにならなかつたとき、比嘉が相手にじつとう振る舞いをするか、中学の時からうんざりするから田代へしてしまつた。マユに

金をゆすり取った男は、五十名を越してゐるはずだった。警察にたれ込まれてから、ついに注意をしはじめてみたが、それはじつとから火がひへとカツヤは煙りっていた。その発火点が自分であることは、あくまで隠の注意や払われはまらない。仮に自分のスースで警察に発覚すれば、自分で引ひながらはいけない。比嘉は何名かの半才へ回して女めめを手てへた。カツヤの底へ、比嘉は

ユースが報じられていたら……。

が取れなくへて困るのをかんじさせていた。窓際のソーラン一人座り、酔いが苛立ちや
てへりかき捲った。顔を切られた様に見えたが、マコを余計に弱らせたのは失敗だった。客
が去ってから間もなく、窓の外の大した痛みはなくなっていた。マコは自分の頭が再び頭痛が
止まらなかったのか、じつは頭痛が再び頭をめぐらしていた。やがて自分の頭
状況を男に話す。男が同情してカシタナノオフを渡したのはじだだつ。やがてそれまで
簡単だった。だが、新聞やテレビで、ホタルで血吸虫病になってしまった男が発見されたといふ
101

手を払いのけ、女は大きな身振りで喰立てる。米兵は呆れた顔で画面手を広げて謝った。
十代半兵へらの女が、米兵のしめていた。困惑した表情で女の腰を抱いて、抱くと、その兵の
たがラスの向いで、小柄な若い米兵が沖縄の女と口論してくる。見るからに気の強そつなか
裂いてやられたかった。胸のあわきを抑え、窓の外に目をそらす。薄光のビーチが照らされ
カツヤを見ながら、わらじへ欠伸をした。背中に汗が滲む。女の口にナイフを突っ込み、頬
する。鼻や唇にアスメをかけた男は、カツヤを見て鼻で笑い、女にまたれて髪をなでる。女が
けたたましい笑い声をあげた学生グループの女が、カツヤの母親に気付いて隣の男に耳打ち
はいけしかなかった。

人で座つていいのでは他にない。やのじで少し気が引けたが、近くに落ち着いて飲める場所
窓際の一人がテーブルに座って、カツヤも立ちを抑えていた。カツヤへらの年齢で一
ている連中がいて、大声を上げるのをカウントの常連客がうんざりした様子で眺めている
店の中では大学生らしいグループが騒いでいる。時々、居酒屋から流れてきて「一次会をやっ
来、ジンナだけは手を出さない」としていた。

めてジンナも吸つたが、体に合わなくて吐んでしまった。二、三日は頭痛が消えなかつた。以
からやつた。上級生が笑い、見えないふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふ
かつた。腹を押さえて體へ同級生の頭を押さえると、頬に膝蹴りを加える。それはカツヤが自

上級生に指示されて同級生の一人を殴つたとき、それは決定的になつた。心の鬱憤が解消された
同じ側の人間なのだ、と思つた。

でもくなつた。教室で無視される腹立ちが晴れるよつた気がいいし、自分は彼ひへりで
もグループの中にいる方が心地よくなつた。同級生たちが目前で殴られるのを見て、苦
やつち、比嘉のグループから放課後、毎日呼び出されるようになつたが、教室で見るより
校外に出でてやつていつのまゝへ多めになつた。

休み時間になると教室で一人だけいるのが嫌で、校庭をひらひらして時間を費して
自分も闇を排しながらはいだらけのけじめだと考へた。かなり無理をしていけるが、田舎
同級生で食事に入らるるかづらの方体があるのはなかなかつた。同級生から孤立するが、
同級生たちのそのそこの風ふうふう、カツヤは当然たりの點のけじめと理解した。比嘉に気に入られ、
運動部を組むけど、最も限の接触しかねへなかつた。

比嘉のグループに頻繁に呼び出されてくるが、同級生たちから浮き上がり、嫌悪と怒りが自分
にかかるので、かすかにヤジを飛ばしてやつた。誰も話しかけてはめられ、授業やクラブ活動
連絡や、呼び出し命令が飛ぶが、それがたまらなくつた。同級生たちから浮き上がり、嫌悪と怒りが自分
の原液をかけられた者もいた。

生え始めた陰毛を焼かれたり、太腿にタバコの火を押しこまれたりして、ひどい性器にタ

小柄で方言をべらべる米兵は、心理作戦や情報作戦に従事している奴が多い。誰から以
前聞いた話を思い出した。地元の男には敬遠されそつた中年女にあしらわれていてる米兵を見て、
侮蔑の笑いが漏れる。ペトナム帰りや出撃前の米兵たちが、カウントの下に置いたバケツに
踏み付けて入るはははははははははははははははははははははははははははははははははははは
の一に満たさず、ビル一本で何時間も粘るのを嫌がられる米兵も多かった。中部のティスコには
女自身の米兵とアメリカ好きの女が集まっていたが、時々は1回りも年上の女に逆に引っ
かかってりふる米兵もいた。

姿を見ながら、中学の頃に社会科の教師から聞いた話を思い出した。
普通の町に歩いていて女を、小柄な米兵は熱心に話しかけながら追いついて。その後ろ
にいるヤバールの山中で、米軍の特殊部隊が行つたといつ訓練にひいて、教師はわざと顔に
した。ペトナム戦争当時、南北トナム解放戦線のゲリラ作戦に对抗するために、地形や植生の似
たる兵士たちは一人ずつ山中に散ると、アーマーナイフ以外の装備を持たずして1ヶ月以上森の中で暮らす。自然の中に身を隠す術を学び、相手の頭動脈を一瞬のうちに捕まえたたり、指で喉笛を演ず技術を身につける。ハブや小鳥を捕まえて生で喰い、カエルを生きたまま呑み込み
で暮らす。

食用や薬用になる植物を見分ける。飢えに耐え、五感を研ぎ澄ませて敵の気配をつかみ、木の葉陰や草の茂み、泥の中に潜んで森と一緒に化す。一方の生徒にいっては、それは成功していた。ただ、かやつやつて軍隊への恐怖心を植えつけているので、社会の教師は生徒に基地や戦争、軍隊への否定感を作つてしまつたから。大方の生徒にいっては、それは成功していた。たゞ、カツヤには、教師の言葉によつて喚起された特殊部隊の米兵のイメージが、冲锋でもつとも充実した生きている者として、鮮烈な印象を残した。

街をジョギングで歩いている普通の兵隊たちとは違う本物の兵士が、ヤバールの森の中に潜つくる蔓や濡れた羊歯をかき分け、全身から透明な触覚を伸ばして歩き続ける兵士の顔には、灰色や緑や黒の彩色が施されている。いち早く敵の気配を察し、羊歯の陰に身を沈め、近寄つてくる敵の背後に回つて口を押さえ的同时に、アーマーナイフで頭動脈を焼き切る。柔らかく刃がめり込み、軽い抵抗で頭動脈が切断される。あるいは、組み伏せた敵の上に馬乗りになり、眼窩に親指を突つ込んで頭蓋にねじ込む。腕の中で痙攣する体と手首に伝わる血のぬめり。草と泥の匂いの中に、死んでいく男の血と排泄物の臭いが混じる。死体を隠し、さらに森なり。

“如果說你沒有能力，我以為你應該有個理由吧？”他說着，又接着說道：「我以為你沒有能力，因為你沒有經驗；我以為你沒有經驗，因為你沒有知識；我以為你沒有知識，因為你沒有學問；我以為你沒有學問，因為你沒有讀書；我以為你沒有讀書，因為你沒有父母；我以為你沒有父母，因為你沒有兄弟；我以為你沒有兄弟，因為你沒有朋友；我以為你沒有朋友，因為你沒有家鄉；我以為你沒有家鄉，因為你沒有國籍；我以為你沒有國籍，因為你沒有國籍；我以為你沒有國籍，因為你沒有國籍。」

根据日本的“通产省”和“通运省”的规定，必须在每一种包装上印有“通产省制”或“通运省制”的字样。如果

（三）在本办法施行前，已经取得《医疗机构执业登记证》的医疗机构，必须在本办法施行后，向登记机关申请换发《医疗机构执业登记证》，并按本办法的规定重新登记。

在“新民主主义”阶段，毛泽东思想的“新”主要表现在“新民主主义”理论的提出上。

“不以七十衰而逾之，不以五十衰而逾之”是孔子对曾参的教诲。《论语》中有关“逾矩”的记载有：“樊迟问仁，子曰：‘克己复礼为仁。’……樊迟曰：‘何谓克己复礼？’子曰：‘非礼勿视，非礼勿听，非礼勿言，非礼勿动。’樊迟退，见子夏问孔子曰：‘闻斯行诸？」子曰：‘行。’子夏问曰：‘子云：‘行斯可也。’’子曰：‘然。’”樊迟问孔子“克己复礼为仁”，孔子回答说“非礼勿视，非礼勿听，非礼勿言，非礼勿动”。樊迟退下后，见子夏向孔子询问“闻斯行诸”，孔子回答说“行”。子夏又问“子云：‘行斯可也。’”，孔子回答说“然”。樊迟和子夏的对话，说明了“逾矩”的含义。

（四）問題：「我認為你和你的妻子有什麼關係？」被調查者回答本題如圖一四之六之結果。

連れて行つた。カツヤもコンビニビデオショップに行く以外は部屋にこもつていた。マユが
こういう状態では商売にならなかつたし、カツヤも風邪をうつされたのか全身がだるくて、動
くのが億劫だつた。ベッドに横になり、ビデオを見て時間を潰した。時々マユの様子を見に行
くと、額に汗を浮かべて短い呼吸を繰り返し、眠り続けている。食事やトイレ、着替えをさせ
るとさも、目を開けることはほとんどなかつた。ヨーグルトや栄養食品のゼリーを摂らせても、
一口か二口で終わつてしまつ。叱りつけても言うことを聞かない。ただ、生きようという本能
が求めたのか、粉末の風邪薬を混ぜたカツアの牛乳だけは、日に二度、十分近くかけて飲み干
した。

三日目に、マユの熱は三十七度台になつた。少しは落ち着いたのを見て、カツヤは十時過ぎ
からスロットマシンをやりに行つた。開店して半時間も経たないのに、スロットマシンのコ
ナハ半分以上の台が客で埋まつてゐた。出が悪いと早めに移動して、五番目に座つた台で大
当たりした。流れ作業のようにコインを入れ、バーを叩いてボタンを押す。何も考えずにその
作業に没頭した。ダブルやトリプルでアガ並ぶのを、まわりの客たちが呆れたように見る。滅
多に味わえない興奮と満足感に浸ろうと、カツヤはゆっくりと目押しし、役がそろう瞬間の切
ないような快感を引き延ばした。

午後四時過ぎ、まだ出そな合から立ち上がつて、係員を呼んでコインが詰まつたドル箱を

運ばせた。そばの台にいた七十歳に近そな老女が、空いた台のコイン受けに素早くタバコの
箱を置く。カツヤはカウンターで景品とシートを受け取つて、駐車場の隅にある交換所に
行つた。換金すると六万円以上儲けていた。

急いで部屋に戻つてシャワーを浴び、マユの様子を見た。もう少しすれば起きられそうに思
えた。しかし、客が取れるのがいつになるかは判断できなかつた。タオルで顔や首の汗を拭き、
静かに引き戸を閉めて部屋を出た。車に乗り込み、エンジンをかけたとき、この二日間考える
のを避けてきたことが目の前に迫つた。

一枚も写真を持たずに出張と会うのは初めてだつた。比嘉の指示に逆らつたことなどなく、
いつも求められる以上のことをやろうと努力してきた。この一、三年は、自分が比嘉の役に
立つてゐるという実感を持つことも多かつた。比嘉から直接誉められることはなかつたので自
己満足かもしれないが、それで十分だつた。五八号線に出て、国際通りに向かう車の中で、
カツヤは言い訳の言葉を探し続けた。マユが風邪で使い物にならなかつた、という理由で比嘉
が納得してくれるか不安を抑えきれない。ただ、それ以外に余計なことを言えば言つだけ、い
い結果にはならないのは経験で分かつた。

三越裏の駐車場に車を入れ、国際通り沿いの銀行に行って、母親から渡されたキャッシュ
カードで十万円を下ろした。紙幣を入れた銀行の封筒を一つ折りにし、カツヤはビリヤード場

「おまえが『おまえの本』を書くのが何でかわいいんだよ。」
「ううん、おまえの本はおまえの本だよ。」

第10章

卷之三

但你也是个好孩子，以后要小心点，不要把事情闹大了。

「手筋が少く、並列や小文字を頻繁に書く」→ 読解力が弱くなる(ひどくなる)

不_レかおはなへんがだき、不_レかおはなへんがだきへんをひきぬくと、おはなへんがだきへんをひきぬく。

「お嬢様」お嬢様の片手に取扱いやすい木製の手形をした「お嬢様用の手形」が、お嬢様用の手形

松田の妻が心筋梗塞で倒れる。心筋梗塞は脳梗塞と並んで死因の二大死因である。

卷之三十一

卷之四

〔本段文字引自多數學家〕
主張亞里士多德的「形而上學」者，認為人是不能對「形而上學」的問題作回答的。但又主張川端的
「藝術和美」是「形而上學」的問題，因為「形而上學」的問題就是「藝術和美」的問題。
所以川端的「形而上學」，就是「藝術和美」的問題。但又說「藝術和美」不是「形而上學」的問題，
所以川端的「形而上學」，就是「藝術和美」的問題。

「おう、アーモンド味のアイスだ。さあ、今度はおまかせを。」
「うーん、うまいな。でも、もう少し甘いのがいいかな。」
「うーん、うまいな。でも、もう少し甘いのがいいかな。」

泊大橋の外灯が弧を描いて並んでいる。
松田は他の車に携帯電話で連絡を入れ、状況を確認した。捕まえたら女はホテルに連れ込まれる
からな、お前も相手するか」と前の席まで臭ってくる息を吐いて笑う。カツヤは腰筋に返事を
して、腕をさすりながら外に注意を払った。昼間と違い、エアコンが利きすぎて寒いへらへらへら
たつたが、暑がりの松田の手前風量を弱めていることはできなかつた。角を曲がつて前からひし
ひし

くつかからなかつた。公園から少し離れた小学校の隣のそばに車を停め、トレーラの個室に入つている当間といふ男から連絡が来るのみだった。電話は取り次ぎ制にしてあって、少女たちからかかるたまに店長が当間につなぎ、待ち合わせの場所と時間を決めて松田に連絡する手筈になっていた。昨日、一昨日と、少女たちが電話をかけてきたのは午後八時頃だったらしい。車内の時計は七時十六分を表示している。アドリバードにしてたせ、フローバーフラス越しにカツヤは空を見た。深い緑色で燃えかゝって星が光り始めていた。水平線近くにはまだ青と緑の中間色が残り、

「三、前一人で何とかなるだらう」
松田が後ろの席から笑いながら言つ。カツヤたちの隣へ、1人で分乗した仲間が公園周辺を移動しながらブループを探してゐてゐた。たゞそれたぐや達は囲碁が必要で、それゆえカツヤや松田は松田は言つた。少女たちが指定した場所で立っておられたが、おしゃべりしてゐる男たち

二日前に襲われた中年の男は、指定された公園のアパートの前に立って、中から出てきた三人の男に取り囲まれ、障害者用トイレに引率され込まれて袋たたみの目に遭ふ、財布を奪われて

この公園の入り口近くへ向かうと、公衆電話を頻繁に利用してゐる。さうした中学生と少女性たるものが、さうした場所で公衆電話を頻繁に利用するのである。

「いいで持つてへれはる」

た。

そう言つてカツヤが来た方向を目で示すと、茶髪の少女が背伸びしてカツヤの視線の先を見

「向に停めてある」

「車は?」

茶髪の少女が聞く。カツヤがひいすいた。

「電話した人?」

ナヘイドのヒトのヒトで出でた。

た顔をしていて。一人は小柄で顔立ちも幼く、小学生じゃなつかと思つた。カツヤはカツヤが出て來た。一人は身長が百六十センチありて髪を茶色く染め、大人びて白立正直ヤシ、シヨウカツヤツツの集い、一人じて格好をしていて、カツヤが行つた。電話ボックスタクスの中でしゃがみ込んで話をしてくる人の少女が顔を上げる。一ノ瀬の様子やつかがつたカツヤは、入り口から五十メートルほど離れたところへ、ちら向きて車していく白塗りの乗用車を認めた。暗く車内の様子は確認できなかつたが、少女たちが少ないせいか、日が暮れると人気がなくなる場所だつた。

「迷惑するな」と

運転席から降り立つといふと、後ろの席から松田がカツヤの肩を叩いた。

灯が少ないので、日が暮れると人気がなくなる場所だつた。

見え。夕方ではヨキヨキをしている人や講席で話をしている若者の姿を見かけながら、外側にはエバーフィールド延びてゐる。その中間あたりに公園の入口があり、公衆電話の明かりが付けてある木が防潮林として植えられてゐる。公園と海沿いの講席との間に道路があり、海側で移動するものに十分つからなかつた。公園は周囲をロクリーク製の擬木で囲まれ、海は、公園に行って、入口から五十メートルほど離れたところにカツヤが止めていた。言われた場所に車を発進して公園に向かうと、後ろでは松田が他の車に連絡を入れていた。言われた場所で移動するものに十分つからなかつた。公園は周囲をロクリーク製の擬木で囲まれ、海は、公園の車が発進してから四、五分後、松田の携帯電話が鳴った。当間から連絡を受けた松田

を確認し、呼んだらすぐに来られる場所で待機しておひきへへ指揮した。

てある。新城がそう報告すると、松田は男たちの車が逃げられないとに撃み撃ひにする。公園入り口の公衆電話ボックスに少女が一人で、近くには男が三人乗つた改造車が停まっている。新城も顔と名前だけは知つてゐる、新城といつて十歳ほどの男だつた。他に助手席と後部座席に一人の男が乗つてゐる。松田が窓を開けて新城と話すのをカツヤは聞いた。

24 カツヤも顔と名前だけは知つてゐる、新城といつて十歳ほどの男だつた。他に助手席と後部座席に一人の車が、カツヤたちの横に来て止まり、運転席のドアが開く。松田の中学校の後輩

を守り土下座して許しを請つ一人を、新城たちは執拗に弄んだ。カツヤは頭を蹴らないうつに注台から降りてきた新城とその仲間が、倒れていた一人をとじろかまわす蹴り始めた。両手で頭底で側頭部を蹴った。横倒しになつた少年が頭をかばうと、腹に靴先をめり込ませる。もう一運動席から降りてきた松田がカツヤに声をかけ。松田は少年に近づくと、いきなり革靴の

「さすが空手ややこりだるだけあるなる」

だった。小柄な体をへへめて、おどしだ目でカツヤを見ている。

路上に倒れているリーダーらしい男の横にしゃがんでいたのは、まだ中学一年生くらゐの少年で新城たちの車が走つてきた。画面からトライアスロード照らされ、少女たちは身動きできなくなつた。乗つている車がトライアスロードで近づいてくる。反対方向からもタイヤをきしませら降りた。車の横に立つていて一人の少女が叫び声を上げ、逃げ出そつとする。松田たちの先に倒れた男を助け起そうとしていたもう一人が体勢を整えながらに、カツヤは護岸か

分力が入った。

くは立てないはすだ」と判断した。右手首をくじいたりしく痛みがあつたが、握った拳には十突つ込んで仰向けに倒れた。溝から這い出で、膝と顎を押さえて座り込んだのを見て、しばらく感触とともに、手首に痛みが走る。口を押さえた男の腹に横蹴りを入れると、男は片足を溝に鼻を狙つて掌底で突く。男の顔が予想以上に前に出ていて、上顎に当たつた。前歯がぐらぐら

に片足をかけて上がらうとする。ハラスを取るために両手が広がり、顔面ががら空きだつた。い声をあげてカツヤに向かつてへる。学習能力のない男は、同じように側溝をまといづ、護岸男を、車のそばにいた一人のうち一人が助け起そうと走り寄る。もう一人が「何か」と甲高い音だける音と、地面に体のぶつかる音が重なる。後頭部を押さえて横面に転がり呻いでいるを突き飛ばした。男の体は一メートル以上飛んで、背中から地面に落ちた。トライボットに波不自然に曲がり、体勢を立て直すと男が手を伸ばす。カツヤは一步踏み込むと両手で男の胸運転席から下りてきた男が、ドストキ利かせた声で喰みながら近づいてくる。公衆電話の明かりで、轟かずる裾の広い作業着を着ていてるのが分かる。側溝をまたいで護岸に右足をかけ男が上がろうと体を浮かせた瞬間、支えとなつていてる脚の膝に関節蹴りを入れた。足首と膝が貼つてあるのを見て、馬鹿じみが、じカツヤは鼻で笑つた。

渡り、側溝を飛び越して道路から五十七センチほど高くなつた護岸に上がつた。少女たちの前でツヤたちを照らし出す。急発進するトライボットの音を耳にして、カツヤは走つて道路を走る少女がおり見て回してから手を上げた。停まっていた白い乗用車がトライボットを、カツヤが口ひょうな調で文句を言つ。少女たちは改めて公園の入口の前に立つと、

意したが、聞く耳を持たなかつた。逆にカツヤの言葉に刺激されたよつて後頭部を踏みしつける。

「お、お、お死なすな。人が来なうまいから車に乗せられ

松田の指で、新城たちのはやいと蹴るのやめ、仰向けに倒れて力無く首を振つていい

一タ一タして男が立つて叫んでいた。脱がせた工ヤシを破つて猿ぐわせかませ、手首をベル

開めた。残りの一人も靴を脱がせて海に捨てる、ビルで手首を縛り、遅れてやつて立つて後ろに手を縛る。靴を脱がせて海に投げ捨てる、新城の車のトランクに横向きに寝かせ

その間に松田は、声を出せないで立つて一人の少女の腕をつかみ、比嘉が乗つている車

古の車に分乗させ、後部座席に押し込んだ。

「女だからといって手加減する」と思つた。

少女は涙声でわびた。

「あなたが後部座席に座ると、中に入た比嘉が松田に合図を送つた。松田は新城に、別の場

所で男たちを適当に痛めつけて「注意」してやるよつた。カツヤに車の鍵を放つてしゃべつた。

少女はカツヤは手首の具合を確かめながら運転席に座つた。新城の車が短くトランクショットを鳴らして先に発進する。松田は軽く手を挙げて見送り、助手席のドアを開けた。

「どうものホテルにな」

松田はカツヤに言つと、後部座席の少女たちを見た。

「静かにしてたら何でもないから」

笑いかける松田の顔を見て、すすり泣きを漏らしていた小柄な少女の声が止んだ。カツヤは

「誰かにしてたら何でもないから」

人が見ていかつたかまわりを確かめながら車を発進させ、住宅街の狭い道を巧みなハンドル

波の上のラブホテル街に来て、松田が言つたホテルの一階の駐車場に車を入れた。真っ先に

降りた松田は、後部座席のドアを開け、少女たちに降りるのを見た。

「逃げようとしても無駄だから。男達を殺されたくなかったら、言いつと聞け」

少女性はつづいて車を降り、寄り添つよつて立つてあたりを見回した。比嘉が降りるの

を待つて車の鍵を開め、カツヤはホテルの玄関に入る松田たちのあとに続いた。少女一人の肩

親指を立てて合図した。松田の父親が経営しているラブホテルで、若い従業員はみな松田の手

下だった。五階建てのホテルの最上階に松田専用の部屋があつて、女たちを連れ込んで開かれて

る飲み会に、カツヤも何度か参加したことがあつた。

「お前ら中学生か？ どこの中学生か？」

表情を浮かべて、グラスをテーブルに置いた。

が体を固くし、テレビから顔をそむけるのを面白そつと見ている。茶髪の少女は不機嫌そうなるダルトビデオに合わせると、女の掛け声が室内に響く。音量を調整しながら松田は、少女たちスに口をつけのを見たが、松田はテレビのリモコンを取りスイッチを入れた。チャシネルをアシマ味だったが、松田本人は想よへしていなかった。恐る恐る手を伸ばした人がグラ

松田が左右の一人に親切そつに言ふ。笑いかけると黒ずんだ歯茎に根元だけ残った前歯が不

「遠慮しないで、飲めよ。食事も来かるからな」

を先に飲み干し、水割りを手にした。

松田が言つたが、カツヤは札を言つて自分の水割りは作らなかつた。比嘉はビルのグラス

「飲めよ」

は一口ご茶の缶を開けた。

人のグラスに注いだ。松田がそれにウイスキーを加える。比嘉と松田の水割りを作り、カツヤのを抑えて、カツヤはドアを開めた。席に戻り、グラスを少女たちの前に置く。松田が、何がいるまだ十代の男で、お楽しめですね、と笑いながら目配せする。一瞬、手が出てそつになる

ドアをノックする音がし、カツヤは従業員からグラスと氷を受け取つた。カツヤも顔を知つ

けじかに飲み始めまる。

がけのソファに座つた。松田は缶ビールを開けてグラスに注ぐと比嘉の前に置き、もう一缶開け松田がカツヤから電話を取ると、ビザを店に注文するよつと指示する。カツヤは比嘉の横の一人カツヤは冷蔵庫からビールヒュースキーを出し、足りない分のグラスと氷をロボットに頼んだ。一人間に腰を下ろす。向かいのソファに座つた比嘉が、品定めをするよつて少女たちを見た。で四人を追い越し、一番奥の部屋のドアを開けた。松田は少女たちをソファに案内して座らせ、模造の観葉植物の鉢が置かれた廊下は、煉瓦色のカーペットが敷かれている。カツヤは途中エレベーターから最後に出た。

はあわて目をそらした。少女たちの甘つたるい体臭に鬱陶しひきを覚えながら、カツヤは開いた射的に押さえた茶髪の少女が、助けを求めるよつに比嘉を見る。比嘉が見返すと、茶髪の少女は、また反抗心が消えていないうが表情で分かつた。カツヤの松元から入るよつとする手を反覆つた歯を剥が出して笑う。小柄な少女はすでに屈服していたが、もう一人の茶髪の少女はじり始めた。胸や下腹部を触り、抵抗できずに顔をしかめていた少女たちを見て、松田はうだつた。エレベーターで五階に上がる間、松田は我慢できないといつて少女たちの体をロビーにある空き部屋を示す。ネルはほんじ消えていて、平日の夜なのに繁盛しているよ

「出せ」

た。

スを犯したいたりやうとした気がしたが、もう運かった。カツヤは少女の手をテーブル首を絞める手に力が加わる。少女はあわてて右手をテーブルの上に載せた。自分が大きすぎた。

松田の変化を茶髪の少女も気づいてははすった。だが、まだ体が反応しきれていないから

「右手をテーブルに出せ」

のボリュームを上げた。

動きが止まる。小柄な少女が両手で顔を押さえてしまふ。松田はリモコンを取ってテレビ少女の首に回った。暴れる少女を胸元に引き寄せ、拳で頭を一回殴った。鋭い音がし、少女の腕をつかむと無理矢理座らせた。少女が抵抗しようとしたら次の瞬間、松田の右腕が後ろから図に乗り、小柄な少女の手を取つて、帰らう、とソファから腰を浮かせた。松田は茶髪の少女はやつていて。松田は苦笑を浮かべて鼻の横をかいだ。一人が何と言わないで、茶髪の少女はカツヤは松田と比嘉の様子をつかがつた。比嘉は表情一つ変えないでテレビの画面に目を知らなかつた。

今まで、ダブループの男たちに曲口主張してきたのだろつ。男たちもまた、そういう少女の生意気を譲してしまつたのだろつ。だが、それがほつたへ通じない男がいることを茶髪の少女はまだ

茶髪の少女がそう言つたは、最悪のタイプシングだった。カツヤは小ぶりで打うちして茶髪の少女を見た。勝ち気そつに唇を引き締め、松田を見つめている少女の目は差しかつた。そやつて子に泡が松田の腿にいはれ落ちた。缶をテーブルに置くと松田はゆりへりと泡を払つた。

カツヤは内心ぶつぶつやつた。松田が缶ビールを小柄な少女の口に押しつけ。顔をそむけた拍子に泡が松田の腿にいはれ落ちた。松田が缶ビールを開けて小柄な少女に持たそつとするが、持とつといしない。持てよ、バカ。松田が目で図を送るのを見て、カツヤは冷蔵庫から缶ビールを一缶出してテーブルに置いて

か? ビールがいいか? 遠慮しながへていいから! 「

」そろそろ嫌つねよ。金に困つてゐるやうなへども相談に乗るからな。ジースを飲まん

ひなけれほひいがと思つた。

松田の言葉に、茶髪の少女がすかに笑つたよつた気がした。カツヤはやつのやつ松田が氣

「学校み面白へなじ、細かいこと、してたりねえふ、してたりねえふ、とん

黙つてゐる小柄な少女のつぶやきが松田の耳に届けられ、指で耳たぶをつけてくる。

「業出して金に困つてゐるのか? それであそんでいたのか、は? は?

れなかつた。

松田は少女たちがビデオにてぞ見つめながら聞いた。下卑た表情をカツヤは見ていく

に押しつけて指を広げさせた。少女の耳が赤くなり、顔が鬱血していくのが分かったが、自分を見られることは、もしろ幸いだったろう。

比嘉が上着の内ポケットからナイフを取り出す。金属音がして飛び出した刃が光を放つ。カツヤ代わって少女の手を押さえた比嘉は、人差し指の爪の間にすっと刃先を差しこんで、赤いユニアクリュアが塗られた爪をめぐり取った。肉のついた爪がテーブルの上に落ちる。一瞬の間、比嘉が少女の手を握りながら、松田の右腕で力が加わり、少女の声が止む。

「今度出した爪はやがてまた伸びるよ。お願いだから静かにしてくれよな」

松田が腕の力を緩めると、少女は喉を鳴らして息を吸つたが、声は漏らさなかつた。少女たちは以前に盛り上がり上がつた血がテーブルに流れ落ちる。両手で顔を押さえて右手が小刻みに震えて、指先に盛り上がりと見て、松田がテーブルのホリュームを落とした。比嘉に押さえられたが、内心で黙りながらうなづいた。

「目を開けろ」

顔を覆っている小柄な少女の手を引きはがし、怒鳴りつける。少女はしゃりへり上げながらカツヤを見た。子どもの頃飼っていた犬の目とやひへりだつた。か、か、めの大は最後はじつひつたんだらう、といつ考えが浮かんだ。

「お、いいの灰皿でいいの指を漬せ。手加減したらお前の指を叩き潰すからな」

カツヤは少女の手に厚いガラス製の灰皿を持たせた。

「お願いです。許してください。もうテレクラに電話をしたりしませんから、許して……」

小柄な少女が、涙で汚れた顔を比嘉に向け、頭を下げる。そういう言動は比嘉の行動をエスカレーターを使ひただけだつた。カツヤは少女の頬を張ると、灰皿を振り上げさせて耳元で怒鳴った。

「今さら運びやんたよ、ハカ。早くやれ、お前、自分の指を漬されたいのか、早くやれ」

テーブルの上に広げられた細く長い指は、血とマニキュアの赤で飾られている。小柄な少女は手を動かしがたが、振り下ろすといはできなかつた。

「やれ」

比嘉がテーブルに灰皿を置く。体を起じた少女のこめかみが青く腫れ上がつてゐる。

が拾い上げ、小柄な少女の側頭部を殴りつけた。松田の方に倒れた少女は両手で頭をかばつた。間に力が弱まり、手の甲には赤い跡がついただけだつた。テーブルの下に転がつた灰皿を比嘉返つた。茶髪の少女が呻き声を上げ、小柄な少女は顔を押さえてすすり泣く。灰皿は当たる瞬カツヤはもう一度怒鳴つた。少女は目を閉じて腕を振つた。灰皿は手の甲に当たつて跳ね

「やれ」

「食えよ」
れ頬張つた。

れ頬張つた。

「追加要ります」

持つて立っている。

変態が。

れる水割りを松田が面白そうに見ていた。

「遠慮しないで飲めよ」
松田の言葉に、小柄な
グラスを取った。口元に

人の少女の前にも水割りを作つて置いた。

美しいながらグラスを取って飲んだ。カツヤは

そこで比嘉が灰皿をテープルに置くと、小柄な少女は何度もつぶすいた。

「これから働いて弁償しろよ」

飛び散った血がついた上着の袖を見せた。

飛び散った血がついた上着の袖を見せた。女も灰皿を手にしたままひじいて泣いていた。やの顔を上げさせ、比嘉は灰皿を取り上げて、が首に回した腕をほじへと、茶髪の少女は右手を抱え込み、声を殺して泣き始める。小柄な少所の棚からオルを取つてきて、平たくなつた指先から血が流れ少女の右手を包んだ。松田は笑いながら体や袖を泣き込んでいた。手首を押さえている比嘉がカツヤを見る。カツヤは洗面かる音が、アピから流れ女の囁き声を一瞬かき消す。茶髪の少女の全身が突っ張り、松田振り下ろした。厚いカラスが入差し指の先端に落ちる。肉の潰れる音と灰皿がテーブルにぶつかるヤの声に頭の上まで上げ、小柄な少女は、いやんね、いやんね、と繰り返して、灰皿を

「ムダハシタガリテルニヤ」

あさりまつり

「お、これが最後の仕事だぞ」顔を伏して灰皿を肩の上に手を乗せ、少女はうつむいて呟く。

目的で少女たちがいたりは高額な金を置けば、逆らつてからまたやったりたそつな顔見せ
もひとと家出したり、遊び回していく少女ばかりで、家族に送りつけ近く所へまほへまほへ
うビデオの方が売れ筋はかかった。いつたん撮られてみては、少女にしつじつもな
で嘲諷みだつた。中にはたしかたり、脅したりして、無理やり撮つたものもあつた。そつ
今まで作つてきたビデオは、三十三本以上あつた。撮影した少女の大多是、小遣い稼ぎが目的
めばかりの隠れ人へひりへり移動する。

元れるな、とカツヤは思つた。少女の全身を撮つたあと、アツブで足元から膝、太腿、生え始
今に伸び出しやうな顔も体も中学生にしては幼かつた。それを好み連中は多かつた。高
へ高へさせると。

した。少女が全裸になると、下着一枚となつた松田が背後に立ち、胸を隠していた両手を左右
背中を向けた少女にカツヤは命令し、少女がジーパンを脱いで下着を取る姿を正面から撮影

」さやけ、顔を隠すな
からカツヤはカメラを回した。

カツヤが撮影の準備を終えたのを見て、松田は少女に命じた。少女がカツヤを脱ぐと

「脱げ」

立て、ビデオカメラを据えて新しいアームセッタを立てた。
行われて、まだためらつてゐる。もつためらつていてる様子に苛立つながら、カツヤは
小柄な少女は、どうした方がいいか悟つたよつた。それからアームスツールに腰を下す。それからアームスツールの頭部を倒す。涙で汚れた
少女がタオルで巻いた右手を胸の前に持つ、小柄な少女を見てすべすべに顔を伏せる。涙で汚れ
た顔がカツヤの胸にわざわざ痛みを与えた。カツヤは少女の涙を拭き消した。
たつた。どうせ逃れられぬからと決意した。少しも逆らふ振りを見せれば、比嘉や松田を刺激するだけ
で、ソーファから腰を上げる。少しも逆らふ振りを見せれば、比嘉や松田を刺激するだけ
小柄な少女が嫌がる振りをしてみたのを見て、カツヤは声を上げた。小柄な少女はカツヤを見
「あらあら」と

ホリムを繰り返してた。小柄な少女の手を取つて、松田がソファから立ち上がる。
オカメ入りたケースヒート脚が置かれている。松田が比嘉に、いいか、と確認し、アレビの
スが空で、カツヤはスニーカーを開けて、松田が部屋の一角を顔で示した。アレビの脇にビニ
けつけなかつた。比嘉はソファでたれてビデオを見ていて、ビデオは手を伸ばす。
た。カツヤはソーファで、それ以上手をしきなかつた。空腹感はあつたが、胃が受
松田の声で少女たちがあつて一切れず手に取る。口に運んで少しあじつたが形だけだつた。

る気にはなれなかつた。比嘉はテレビをアメリカのプロバスケットボールの試合に替えて、ウイスキーを飲み続けて抱いていただれた姿勢のままだった。小柄な少女が漏らす声はすっと聞いていたはずだった。一本目のボールも半分以下になっていた。爪を剥がれた少女は、タオルに包まれた手を指を潰されていなければ、自分もビデオに撮られていたことを自覚していただらうか、とカツ

「いいの撮れたか」
「アカ降り、ウイスキーのグラスを取って飲みながら松田が聞く。うぶせになつて体を震わせている少女の脚を広げ、中から白い液が流れ出すのを撮っていたカツヤは小さく、え、と返事した。少女は枕に顔を埋めている。松田はグラスを手にしました浴室に行つた。
「ヤーの流れ音を聞いて、カツヤはビデオの録画スイッチを切つた。ビデオカメラと二脚を片づけている間中、ヘッドに伏せたまま少女は泣き続けた。鬱陶しかつたが、さすがに怒鳴

少女の目から涙がこぼれ、濡れた性器から音が漏れる。松田は少女を仰向けて寝かせると、全身に舌と指を這わせ、少女の体が拒否反応を示すのを楽しんでいた。松田の表情や体の動きは、見ていた吐き気を催した。それでも、カツヤは少女の体と表情が歪み、震え、くねる様子を撮り続けた。松田が挿入して果てるまで、十五分ほどの間に少女は何度も体位を変えられ、最後は仰向けに体を深く折り曲げられて中に出された。

「カメラを見ろ。同じじ何度も言わせるなよ」「する顔を上げさせること

少女は首を横に振って手を動かし始める。松田は無理な姿勢の少女の体を支え、「やめやめやめよ。お前も友達みたいにならうか、それよ。

同情が危険なのはエモ一繪だった。体力が回復したら、すくに客を取らなければならぬ。この反応が意外だった。女たちに過度に同情するのは危険だった。同情して何も変わらぬだけでは、自分の行動に嫌悪感が募れば失敗を犯す危険性が高まり、自分が痛い目に遭つて田舎でいるかを考えると、何かいたまたまれない気持ちはつた。やへへつた。自分も残った一人の少女のことが思ひ様かぶ。今頃で、少し不安になつた。汗でぬかるみや額に涙が張りつづる。手を当てるほど熱は治まらず、タオルケットにていてマエコに向つてまき眼つけて。体が目立つて少へんなつたマエコの部屋に入るとき、熱と臭気はいちだんと離かつた。ひはりけりしあしてある蛍光灯の下で換気扇のスイッチを入れる。缶ビールを一通り開け、ビール袋の中味を冷蔵庫に入れること苦肉のいた熱と臭気が流れ出してきた。キッヂの明かりをつけ、玄関脇の窓を開アパートに戻る途中、ローバーで缶ビールとり込み、牛乳やヨーグルトを買った。ドアを開

取つたじとの代價がどれだけ重いものか、いかから身をもつて知れはい。自分の中の疚しさを押し殺す。中で言ひ捨て、カツヤはドアを閉めた。

た。しかし、カツヤにはまだまづつかつた。テレグラフに電話をして静かに金を書いた。助けを求める眼差しをカツヤに向けた。これから少女たちに向むいて話していくと心が重かつた。嘉に深く頭を下げてアの方に向かつ。部屋を出るとソノフマの方を見ると、茶髪の少女が田の言葉にカツヤはほほりじてた。これ以上少女たちがいつたおもわれるのも見たくなかつた。

「お前、今日また帰つていいぞ」

電話がけられると同時に気がついた。

かうかうか、と考えたのは甘かうだ。他の仲間が来れば、指を怪我していっては、無事が運がいい。茶髪の少女はソノフマの胸で静かに體を震わせている。指を彫られた方が運がいい。少女が震えて体をひねる。松田は声をあげて笑い、ブルタツプを開けてウーロン茶

電話を手にし、女がくるまるおもてて来たのか、と数名の仲間に声をかけた。

しかし、松田は手に持つて、松田は冷蔵庫から一口の茶の缶を取り出し、茶髪の少女の首筋に押さへた。彼女の胸に手を落とした。松田が体を抜きながら浴室から出てきた。ローバーに電話

かしこなかつた。

やは思つた。先のひとを考えれば、どうオモヤれるより、指を一本潰された方がまだ幸運

生き延びていることができましたが、代わってどうか、部隊の他の仲間は全滅するといつてんだ。
しかし、鳥の存在を証明できました。それと、もう一つの理由があつて、その鳥を見た人に言つてみると、鳥がいた奇跡は消えてしまつた。だから仮に見た奴がいても誰も口に口だが、その鳥を見ることができた奴がいたかどうかは分からぬ。その鳥を見たといふ他
が暗い森に響き渡る。カツヤはやの声を聴いた。気がして身震した。

粉末を振りまく。難色の顔に金色の虹彩と漆黒の瞳孔が打たれ、鋭い嘴から発せられる鳴き声
飛ぶ一羽の鳥。赤や青や緑や黄色など鮮やかな色彩の羽根に覆われ、長い尾が揺れながら光の
話を聞きながら、カツヤの目にやの姿が鮮やかに浮かんだ。薄暗い森の中をゆつたり
い戦場に身を置いて、必ず生き延びようとする。兵士たちはそつ信じてゐる。

ホーハー、虹の鳥と呼んでゐる。しかし森の中でその鳥を見ているのがでたら、どんな激しい戦場に身を置いて、必ず生き延びようとする。兵士たちはそつ信じてゐる。
は飾り羽根がある。全身が極彩色の羽根で覆われてゐるので、米兵たちはその鳥を、レイバーリーの森で虹の鳥から。鳥へはの大柄で、長い尾は一メートル近くもあり、頭へ

手を止め話しかめた。

アーナイフで敵の喉を切る話をした次の時間、社会の教師は突然、黒板に板書をしていた。
ヤンバルの森の奥で訓練をし、特殊部隊の隊員たちの間に、この伝説が伝わっている。

味を自問し続ける。深夜の街をさすがに主人公の陰鬱な姿を見みながら、社会の教師が授業中に、
ほへいかずには殺す。一人生き残った男は、戦場の記憶に苦しみながら、自分が戦つた意
の三名の戦友も、薬物に溺れて急死したり、犯罪に巻き込まれて殺されたり、再会した家族と
伸びた仲間とその後の戦闘で次々と戦死し、帰国できたのは男の他にたった三名だった。そ
生へアーナムの密林の中で、敵の部隊に囲まれ、男の所属する部隊は壊滅的な打撃を受けた。生

場の記憶に苦しみながら、社会をさすがに離れる映画だった。

特殊部隊の男が、帰国してひどい日常生活に戻れず、自分の体に植えつけられた殺人術と戦
へた。彼は元の戦場で生き残った元兵士である。アーナムの戦場で生き残った元
戻った。

かね顔を見たのは初めてだ。カツヤはやの複顔へひそめられてから、自分の部屋に
時間かけて牛糞を嗅かせ、汗をかく汗を拭いて、静かに頭立ててくれる。いい匂いがする。
一枚一枚はくじとり輪郭を描いてみるのに、全体を見るときが微妙に妙にしていく。并
け工房の複雑な色彩の美しさが際立つ分、引ひいた肉の盛り上がりは醜かっただ。
た。よく見ると、カツヤの複顔は、中筋に沿って走る虹の筋、筋に筋してへんむら。羽根の
う。自分で書いてみた、カツヤはキツツコブ进入到牛乳に風邪薬を混ぜ、部屋に戻る

翌日、カツヤが目覚ましたのは午前十時過ぎだった。ベッドから下りると、クーラーをつけっぱなしにしたまま窓を開けて換気した。部屋に差し込む陽光に顔をしかめ、洗濯をしなけ

いた。

戦場から救援を求める無線の声が響き、画面が暗転する。

戦場から救援を求める無線の声が響き、画面が暗転する。

で死んだ戦友の形見だった。森の上を飛ぶドレピ局のロゴ。タカラカメラが男に向けられる。街のショーワイバーで死んだ戦友の形見だった。森の上を飛ぶアーティストからカメラが映し出される。地面に倒れた男の姿が映し出される。へしゃしゃの瓶袋にウイスキーの瓶を入れた浮浪者が画面を見つめ、一口あおって死んだ男のために涙を流す。遠くの高層ビル街を背景に、森の上を旋回する機のロゴ、アーティストの密林の上を飛ぶロゴの映像が重なる。

ナナイフで切り、大木の根本に崩れ落ちる。倒れた男の見開かれた目に、しやがんで男をのぞき込む女の子の姿が映る。数名の警察官が走り寄り、女の子を抱きかかる。州兵の連れたナナイフが、死んだ男に吠えかかる。倒れた男が手にしているアーマーナイフは、ハトナムジエ。

だから幻の書がまだあります。教師たちは、彼らの生徒たたかうと願望が生まれました。たとえば、特殊部隊の兵隊たって本当は戦場で死にたくないのです。しかし、彼の生徒たたかうと願望が生まれました。たとえば、特殊部隊の兵隊たって本当は戦場で死にたくないのです。映画は後半になると、主人公の男は、勝手に頭を抱いていました。これが他の男たちの姿を始めたのです。最初は、男は人質にするために幼い女の子を拉致し、最後は森の中に逃げ込む。女の子を抱いて森を歩き続けた男は、深い青緑色の湖に出て。そこには生き残った戦友たちと一緒に乗った兵士のライフルが男をして立ります。水面が波打ち、そこに映る兵士の姿が男をして立ます。水面に映る兵士の姿が男をして立ます。地面に下ります。白いワープを着た小さな背中を押して湖の方へかかると、男の姿が見えます。男の姿が見えます。

逆さまの仲間が生徒会室でいたときに、虹の服を見た男を殺された跡があるらしい。だから、虹の鳥足はまだ誰かの口から出でてゐる。虹の實の眞味は、存在を證明する証拠となるべきである。

て寝かせたかったのでしたが、ひどい。室内の臭気も氣にならなかったのは午前一時過ぎだった。マユの部屋をのぞくと、一方、新しいシーツに替えて行きました。彼女は外を眺めながら、ビールヒュイスクーを飲んだ。

かい続けた。コインを出しては吸い込まれを繰り返し、最終的には七千円の負けだった。帰り取り入れて整理してから、部屋を出た。途中で食事をして遊技場に戻り、閉店まで同じ台に向の方、部屋に寄ってマユに風邪薬入りの牛乳を飲ませ、ヨーグルトを少し手えた。洗濯物を見つめ、氾濫する機械音と放送音の中に身を置くのが一番だった。

沿いの遊技場でロケットマークのバーを聞いた。頭を空にするには、回転するドームの絵柄午後は近所の喫茶店で昼食をとり、ビデオを返却して新しいのを借りた。そのあと、五八号でした。

横になつて再び眠つていた。タオルケットをかけて、カツヤは両方の部屋とキッズを掃除され、此嘉に与えられた役割として、自分を納得させていた。マユの部屋に行くと、マユは床された。午前中、マユと自分の洗濯物を洗つてパジャマに干した。衣物の下着を干していく滑稽な部屋の隅に寄せてあつたマユの洗濯物を抱え、自分の部屋からパジャマに出て、洗濯機に入らめしかねかった。

と、無力な自分が夢で寝てゐるへへへ。やつぱり自分でもつかないには、考へるといふ

ければならなかつた。キヤッショウカーナードの十万円は使いきり、やりきつて金を工面するか考へる。客を取らせるには、まだ数日かかりそつた。休んでいる間の分の現金を用意しないでいる、と思つてはいる自分がおかしくなる。何を喜んでいるのか、といつ声が聞かずかに笑みが浮かんだよつた気がした。それが錯覚だったとしても、カツヤは嬉しかつた。

マユは三、四歩いて部屋の中央に腰を下ろすと、抱えた膝に顎を載せて目を開じた。回復の口の外からマサニグロで拭いて、やつぱり汗をかいていた。床に立つたマユの顔に、か半 sleeve, 自分の意志で牛乳を飲んだ。初めての口にカツヤは驚いた。全部飲み終えたマユは、マユははつぱり目を開けた。背中を支えてやると、唇に当たられたカツブリにキツツに寄つてカツブリに牛乳を入れ、風邪薬を混ぜて部屋に戻る。薬だから飲め、と元カツブリからオルガストを取つて体を拭き、下着とTシャツやジーンズを替へさせた。

マユは口のスナッチを入れて体温を調整した。それから、マユの体を起し、持つていたカーディiganを脱がした光が螢光灯の光と混ざり始めて、部屋の臭気が少しはへりはじめていた。カツブリは、部屋からマサニグロでオーラを取つてTシャツを替へさせた。

おはは、と笑つた。マサニグロは、体拭いて部屋でマサニグロパンツとTシャツを着け、

日曜日の朝だった。一人で家の近くの道を歩いていたカツヤのそばに小型のバスが止まつた。

出した。

り得た色々な可能性が。複数のマスクも自分も同じだ、という思いが湧いてくる。マスクを哀れむ振りをして、自分を哀れんでいたけではなか。今、どう何を悔やんでも無駄だ。カツヤは胸の中でしゃがみ、壁に手をついて体を支え、自分の部屋に行つた。ベッドに座り、リモコンでテレビをつけようと、やんばるの森を空中撮影した映像が画面一杯に映る。鮮やかな新緑が複雑な起伏を作つて山々を覆つてゐる。沖縄民謡を現代風に変えた音楽が、森の映像に重ねて流れている。カツヤは画面を眺め、中学一年になつたばかりのある日のことを思い

松田の話では、父の行方が知れなくなつても、母親は何の対応もしていなかつた。元に戻るところ、もう戻る場所がないだらう。カツヤはトヅヤツの襟元から手を入れ、背中の傷にそつとうつむき、火傷の痕は少し温めて冷たかった。ひの傷の跡に縫されてしまつたのだ、あれど触れた。

の脇に立つて見下ろすと、復息も静かで額には汗も浮かんでいない。この五日間、風邪薬と共に使はれてはおらず、体力も回復して元の生活に戻れるのだろうか。やがて考へが済み、そんなこと思つて、此嘉から渡された錠剤は手えていなかつた。この手と手

翌日、カツヤは十時の開店前に遊技場に行き、モーニングサービス台を狙って行列に並んだ。優秀サービス台や引当てる台などはなかなかつた。一方、食事がてら部屋に戻った以外は丸一日店を出て途中で何度も吐き気をこぼしながらじっとりとか部屋に戻った。キッチの明かりを点け、水道から水を飲んでいると吐き気が込み上げ、流し台に胃の中の物をがぶがぶすき、体を起してすみと再び胃がつねり始める。三度幅吐を繰り返し、やっと流し台を離れた。しかし、自分自身の体から発する臭いが、部屋を汚していくのがつらった。入浴を感じた。むしろ、自分自身の体から発する臭いが、部屋を汚していくのがつらった。